

夢の日本上陸、佐世保港沖

平素は閣下夫人といわれ「そうでございます」の貴婦人スタイルも「盗み」「人売り」「儲けるため手段を選ばぬ」「素朴さから怒り」「悪言雑言」等、人間の本性、個性むき出しの汚い、悲しい話題を満載した大瑞丸も、母国佐世保港沖に投錨した。検疫官の検疫の結果、疑似コレラ患者が若干名いるため、約一週間以上上陸できず、停船させられた。夢にも見ていた日本の港を目の前にして、上陸できぬ心の動揺から、焦りと不安、不満爆発で、多数の者が自己本位となつて、「コレラ患者は残して我々を上陸させよ」「患者といっしょにするのは不合理だ」「団幹部は我々の要求を当局と交渉せよ」と大騒ぎとなつた。

いよいよ上陸、この土は日本の土だ

上陸命令は一週間後にあり。全員我々を運んでくれた大瑞丸タラップから、佐世保海岸壁に上陸した。

「この土は日本の土だ」「皆日本の土を踏んだぞ」と誰かが叫ぶと、子供のようにいっせいに「日本の土だ」「日本へ帰った」と飛び上がる者もいた。検疫所と税関

の検査に米軍MPが目を光らせていた。頭からメリケン粉のようなDDTの消毒、荷物検査にも同じ、荷物に珍らしい者はMPが失敬したが、日本に帰って来た嬉しさか、文句を言う者はいなかった。

収容所入り

胡蘆島港の収容所と違い、すべてが満点。それに帰国できたという絶対の安心感から、悪くてもよいように映るのが人情。比較して悪い面は何もない。収容所長が「ご苦労さんでした」「もう大丈夫です」「皆さんが定着地に行かれるまで、心から寛ぎ下さい」と挨拶のあと「皆さんの無事帰国を祝福して、酒一人一本、赤飯を特配する」という言葉が終らぬ内に誰かが「萬歳萬歳」と叫ぶと全員がつかれて「萬歳」の声となった。

満州引揚者の体験より

長崎県 田島 梧郎

私は昭和八年八月、満州鏡泊学園学生（二百余人）と

して渡満し、元吉林省寧安県鏡泊湖畔に創設された鏡泊学園に学んだ者です。鏡泊湖は大陸では珍しい山の中の美しい湖です。その湖畔において、鏡泊学園は青年の教育とそれに伴う学園村建設事業などを実行する所でした。その目指すところは『大亜細亜主義』中国の孫文先生や日本の宮崎踏天同じく玄洋社民間有志の諸先生ら皆、目的は一つ。それは、『亜細亜の復興と提携』を志す青年たちを陶冶鍛錬して、民族協和・王道楽土の建設という満州建国の理想を達成するための一大実験道場とすることでありました。

「今から半世紀前のことになりますね。あなたの渡満の動機は」と、改めて問われると、「そうですね、一言で言えば、青年の血気が大陸に向かわせた。」とでも言うところでしょうか。明治・大正・昭和の初頭、「海の彼方」に支那がある。支那に「四億の民が待つ…」このような大陸浪人の歌が高唱されたもんです。だから、私の渡満の動機は、明治維新以来先輩諸先生の抱懐していたアジアにおける日本の使命観ともいうべき堅い一面と、青年の情熱が一体となって大陸に向かわせたのでしょ

ね。

鏡泊湖では、厳しい原始の世界とやさしい自然のロマソンが満ち満ちていましたよ。学園はその後、幾多の試練と困難に遭遇し、昭和十年の末に一応解散することになりました。そして、大半の卒業生は満州各地に転出し、現地には二十数人が残って村作りを始めました。私はその中の一人なのです。それから十余年間、敗戦引き揚げまで、鏡泊湖に住みつき、日本国籍を持った満州国民という『現住民』生活を続けたわけです。

村作りは、初めは随分と危険や苦勞がありました。二年経ち三年とがんばり通して、ようやく宮農の目どがたち、現地自活の道が開けてきました。原住民とも仲良くなり手を携えて大鏡泊湖村の建設を目指し、その中核的存在として協和の実を挙げつつあったのです。昭和二十一年八月九日、ソ連軍侵入、敗戦、降伏、満州国崩壊、避難生活、そして二十一年、麻袋一つの引き揚げ姿——そのすべてを失って帰ってきました。だが、得たものもありました。それは日本人としての貴重な体験です。

前にも述べましたとおり、私は鏡泊湖在住十余年の間、

学園村員として農業に励む外に漁業や林業等も担当しており、現地の人々とは特に深い交際がありました。鏡泊湖上の冬期漁業や哈尔巴（ハルバ）嶺の原始林伐採搬出作業など、彼らと起居を共にして働きましたから、その生活ぶり、その人柄、感情の琴線にも触れることができました。また、鏡泊湖の近くにある東京城の渤海遼の遺跡や満州の歴史などを調べることによって、満州と日本は遠く祖先を同じくしていることも知りました。みんな皮膚の色を同じくするアジア黄色人種なのです。しかも、漢字文化圏に住み、話せば分かる仲間同士なのです。

人種的にも通古斯（ツングース）族や蒙古族は共にウラルアルタイ語系に属する民族です。中国本土を主とする漢民族は秦漢以来万里の長城を境としてその南に居住し、北は、中国からは「夷狄よ、蛮族よ」と蔑視され、その反面、恐怖の対象となっていた東夷（トウイ）北狄（ホクテキ）西戎（セイジュウ）等諸民族の棲み家だったのです。騎馬遊牧狩猟の剽悍な民族群です。中国各王朝の興亡の歴史は、常にこの北方民族とのかかわりあいの中にあります。

満州、蒙古の地より興り長城を越えて中国本土に侵入し、その全部あるいは一部を占領統治した異族王朝は少なくありません。匈奴・扶余・高句麗・渤海・遼・金・元・清…など。反対に中国より討って出て北を征服し、あるいは羈縻（キビ）政策による遠隔操作によって北方を治めたのは、古くは燕・秦・漢・魏、下って隋・唐の時代、元に反発して興った明王朝、近代に入って満州族の清を退位させてようやく成立した中華人民国国民党政権、第二次大戦後革命により共産党独裁の中華人民共和国が生まれ、ほぼ清の版図を踏襲して今日に至っています。

中国の辛亥革命によって滅びた清朝は、日本の徳川幕府とほぼ同じ時代の長期政権でありました。三百万に足らぬ満州族が四億の民の中国全土および蒙古、ウイグル、チベットまでも席卷し、朝鮮・台湾・越南を属して一大清帝国を打ち建てたのですから正に驚きです。しかし、権力の座に上った満族は、王都に移り住んで『北京の春』を満喫飽食し、武を捨てて遊蕩児になり果ててしまい故郷の満州を放置して省みなかった。そこへ、中国の山東、河北方面の土地を持たない農民や困窮者たちがどっと移っ

てきた。清朝はあわてて封禁令や招墾合などを出して統制したが、その流れを止めることはできなかった。

時あたかもアヘン戦争を契機とした西方東漸の時代（十八〜十九世紀）。英・佛・蘭・西・独などが南方から植民地獲得競争を始める。北からは帝制ロシアがシベリア・沿海州を併呑し満州・朝鮮を狙ってくる。清国はもちろんのこと、一葦帯水の日本にとっても喉元にドスをつきつけられたような国家存亡の危機でありました。日清・日露の再役は新興日本にとって避けることのできない防衛の戦争であった。幸い勝利を得たため自衛の主旨は達成できたが、勢いに乗って日本は兄弟たるべき李朝鮮を吸収併合し、満州においては鉄道など既得権益に固執して、「自国のことにみに専念し」、アジア復興という「崇高なる精神」をおろそかにしてしまった。

すでに満州においては中国より移住してきた漢民族の数は二千万人を数え、南滿の遼河地域を中心にして二世三世の世代と代わり・生活基盤も固まりつつあった。張作霖・張学良政権はこのような背景のもとに生まれた。初め親日、のち、学良の易箝によって排日運動は激化し、

ついに満州事変勃発となった。たとえ、日本軍部の力によって生まれたとはいえ、満州という広大な地域においては、そこに住む漢・滿・蒙・日・鮮の諸民族の協力による新国家の建設が最も自然な姿であり、その健全な育成がアジア復興のさきがけになる：この考えは今になってもそれ相応の根柢のある論理である。

私たち若い日本人はこの信念に基づいて生真面目に、それこそ真剣になって努力したものであった。しかし、権力の座につくと専制傲慢、そして隸従腐敗がはびこる。日本人は大なり小なりこの病弊にとりつかれて、特権階級として彼らから敬遠され疎外されていたのである。：そして、終戦、動乱。一朝にして丸裸になってしまった。反省を要するところである。

#### 平和祈念

『民主と平和』を叫んでいれば日本では『先生』と言われる。終戦後新しい日本国憲法が公布され平和国家が発足した。長い間戦いに明け暮れていた日本国民にとっては、敗戦の結果とはいえ平和の到来は乾天の慈雨であった。占領国の圧力と敗戦国民として自信喪失の時期に作

られた新憲法は『押しつけ憲法』と言われているが、それはそれとして、憲法前文を読むと人類の崇高な理想が高々と掲げられている。「世界の恒久の平和を念願し……」とある。更にそれに到達するための道順が示されている。これからの日本は「専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めている国際社会において名誉ある地位を占めたいと思う……」私はこれを熟読して、あらためて世界の現状と日本の置かれている地位とを考えるのである。なんと世界の歴史は『戦争と平和』の繰り返しであったことか。また現在も、専制と隷従、圧迫と偏狭が存続して世界各地において動乱や紛争が絶えないことか。平和を維持することは生易しいものではない。「白国のこのみに専念して他国を無視してはならない。」(同前文) これは個人においても同様である。今日、豊かになった日本人は海外に進出して経済活動を行っている。発展途上国の人々に対し経済的圧迫と専制的驕慢な態度をもって臨んでいるようなことはないであろうか。

東洋道徳の本は『仁』の精神である。相手の心になっ

てお互い思いやりつつ調和発展することである。欧米型のように万事ドライにスピーディーに、そして、ビジネス的に押しつけるのとは質が違うのである。われわれは国際人であると同時にまたアジアの中の一員であることを忘れてはならない。——以上は私が満州において得た貴重な体験として言い残しておきたい。

平和は口で唱えるだけでは決してやって来ない。国民一人一人が自ら実行し、正しい認識のもとに国政の中に生かし、さらに国際社会に反映させることによって初めて招来できる。

### 特別な立場に置かれた

#### 引き揚げ者の体験

鳥取県 江原直巳

父母は今の北朝鮮、朝鮮咸鏡南道元山府に明治三十七年ごろ渡鮮、私はその元山で明治四十四年三月一日生まれた。父熊太郎は居留民団副団長、その後元山商業会議